

目的 ファッションの多様化、複雑化の中で、女子学生の被服に関する嗜好、意識は、どう変化しているのか。そのニーズに対応するには新しい見地から着装についてのイメージを明らかにすることが必要である。

その一手法として、今シーズン学生が最も着用したいドレスを製作、着用させ、その色彩、柄、素材、シルエット嗜好の感性的データを基に、潜在的な嗜好、意識を究明し、被服デザインの基礎資料をえることを目的とした。

方法 1) 東京家政学院短大 家政科学生 152名 (1984年 107名、1985年 45名)、年齢18~19歳。 2) 生地購入時期 1984年10月、1985年10月。 3) 検討 素材生地の鑑別、測色、色調、素材、柄、スタイルについて流行との関係を調査。 4) ホテリングの主因子解でイメージ分析をおこなう。

結果 学生が選んだ生地素材は、秋冬物のため兩年共に殆んどウールであった。天然繊維ブームと一致。'85年秋冬はフェミニン感覚のエlegantなもののファッション傾向が変化しているために数年つづいた黒、灰からクリアな色彩に変わってきた。スタイルも落ち着いた雰囲気の中に女性らしさ、可愛らしさを好む傾向となった。イメージ・プロフィールは落ち着いた、上品な、好きな、女性的な、清潔なが上位である。

因子負荷量は第1因子は可愛らしい、美しい、第2因子、渋い、落ち着いた、第3因子、個性的な、独創的な、第4因子、単純な、女性的な、となった。個人値と色彩との対応により、女子学生のファッションに対する意識は、敏感であることが明らかになった。